

世界遺産

「神宿る島」

宗像・沖ノ島と関連遺産群

世界遺産

「神宿る島」

宗像・沖ノ島と関連遺産群

公式ガイドブック

目次

04	プロローグ
06	遺産群の位置
07	構成資産関係図
08	世界遺産としての価値
10	「神宿る島」沖ノ島
12	構成資産 沖ノ島・小屋島・御門柱・天狗岩 (宗像大社沖津宮)
14	巨岩群に残された祭祀遺跡
15	航海の安全と交流の成功を求めて
16	岩上祭祀遺跡
18	岩陰祭祀遺跡
20	半岩陰・半露天祭祀遺跡

プロローグ

「神宿る島」――

沖ノ島は島そのものが信仰の対象として
今日まで守り伝えられてきました。

遙かな昔より大陸との交流の舞台となってきた

九州北部と朝鮮半島とを結ぶ玄界灘。
げんかいなだ

人々はその波間に蒼然そうぜんと現れる沖ノ島の姿に
神の存在を見出し航海の安全を願いました。

四世紀から九世紀にかけて島で行われた祭祀さいしの場は
神に祈りを捧げたままの姿で現代に残され
古代祭祀の記録の「宝庫」となりました。

たごりひめのかみ たぎつひめのかみ いちさしまひめのかみ
田心姫神、湍津姫神、市杵島姫神の宗像三女神を
おきつみや、なかつみや、
沖ノ島の沖津宮、大島の中津宮、
九州本土の辺津宮にまつる宗像大社。

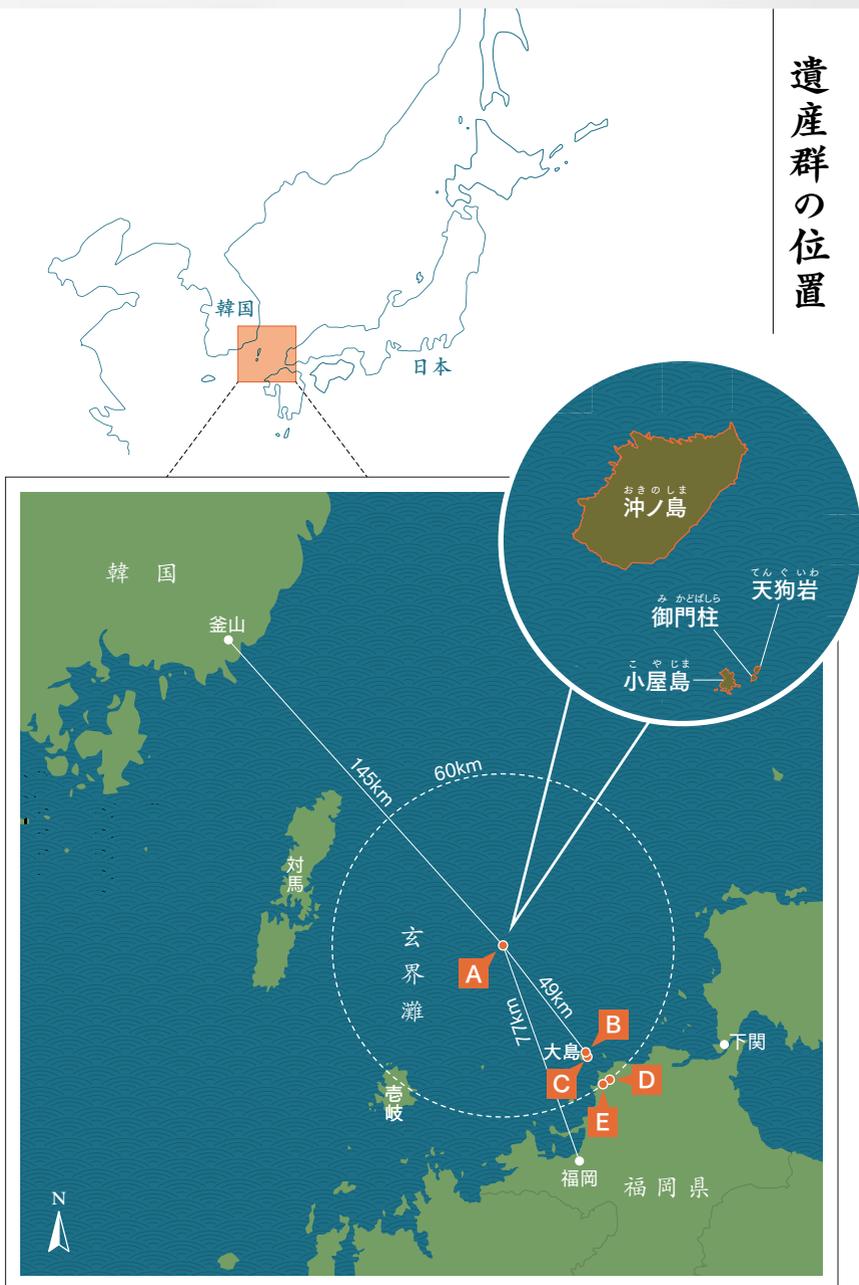
厳格な禁忌などで渡島できない沖ノ島を拜むため
大島の北岸に設けられた沖津宮（ようばいしよ）遙拝所。

沖ノ島に宿る神への信仰から宗像三女神信仰を育んだ
古代豪族宗像氏が眠る新原（しんばる）・奴山（ぬやま）古墳群。

大切に受け継がれてきたこれらの宗像地域の宝は
二〇一七年七月

「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群として
ユネスコ世界遺産一覧表に記載され
世界の宝となりました。

遺産群の位置



- A** 宗像大社沖津宮(沖ノ島、小屋島、御門柱、天狗岩) **B** 宗像大社沖津宮遙拝所
C 宗像大社中津宮 **D** 宗像大社辺津宮 **E** 新原・奴山古墳群

「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群

— 構成資産関係図 —



本書の凡例

- ※1：宗像大社は歴史的には「宗像神社」「宗像宮」「宗像社」などと表記されてきましたが、世界遺産としては1977年から正式に採用され、現在一般に通用している「宗像大社」の呼称を用いています。
- ※2：「沖津宮／中津宮／辺津宮」の「宮」は、一般には「みや」とも「ぐう」とも呼ばれますが、世界遺産としては『古事記』『日本書紀』以来の「みや」を用いています。
- ※3：「遙(遙)」の字体については、大島にある固有の構成資産名には「遙」を、それ以外では「遥」を用いています。
- ※4：古代のムナカタは「胸肩」「胸形」「胸方」「宗形」「宗方」など様々な表記がありますが、引用を除いて「宗像」で統一しています。

世界遺産としての価値

ユネスコ世界遺産委員会の決議文から

概要

九州北西岸から60kmに位置する沖ノ島は、古代祭祀遺跡の類い稀な記録の宝庫であり、日本列島と朝鮮半島およびアジア大陸の諸国間の交流が活発だった時期の祭祀、すなわち、4世紀に起こり9世紀末まで執り行われた航海安全に関わる古代祭祀のあり方を示す物証である。宗像大社の一部となった沖ノ島は、その後も今日に至るまで神聖な存在とみなされてきた。

沖ノ島全体が、その地形学的な特徴と、豊富な考古学的堆積物を有する祭祀遺跡、そして原位置を保ったままの膨大な数の奉獻品とともに、この島で500年にわたって執り行われた祭祀のあり方を如実に示す

ものである。原始林、小屋島・御門柱・天狗岩といった付随する岩礁、文書に記録された奉獻行為、島にまつわる禁忌、九州および大島から沖ノ島に開けた眺望、これらはみな、その後何世紀もの間に対外交流や信仰の独自性の高まりによって祭祀の慣習や意味が変容したにもかかわらず、沖ノ島への崇拜は島の神聖性を維持してきたことを雄弁に物語っている。

宗像大社は、約60kmに広がる範囲に位置する三つの異なる信仰の場、沖ノ島の沖津宮、大島の中津宮、九州本島の辺津宮から構成される神社である。これらは古代祭祀遺跡に関連づけられる生きた信仰の場である。宗像三女神に対する崇拜の形態は、主に社殿において執り行われる祭祀において

「世界遺産」とは

国や民族を超えて人類が共有するべき「顕著な普遍的価値」をもつことが認められ、世界遺産条約に基づいたユネスコの世界遺産リストに記載された資産です。「文化遺産」と「自然遺産」、その両方を兼ね備えた「複合遺産」の3種類があり、本遺産群は「文化遺産」です。

「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群は、2017年7月12日（審議が行われたのは7月9日）、ポーランドのクラクフで行われた第41回世界遺産委員会において、世界遺産に登録されました。

今日まで引き継がれ、宗像地域の人々によって守られてきた。大島の北岸に建てられた沖津宮遙拝所は、「神宿る島」を遠くから拝むための信仰の場として機能している。沖ノ島へと続く海を見渡す台地上に位置する新原・奴山古墳群は大小の墳丘によって構成され、沖ノ島を崇める伝統を育んだ宗像氏の人々の存在を証明する。

*₁ 評価基準(ii)

「神宿る島」沖ノ島は、航海安全のための祭祀が執り行われた島で捧げられた、多様な来歴をもつ豊富な出土品によって、4世紀から9世紀の間の東アジアの国家間の重要な交流を示している。奉献品の配置や祭場構成の変化は祭祀の変遷を証明し、それはまた、アジア大陸、朝鮮半島、日本列島を拠点とする国々がアイデンティティの感覚を発達させた時期に起こり、日本文化の形成に本質的に貢献した活発な交流の過程の性格を反映するものである。

*₂ 評価基準(iii)

「神宿る島」沖ノ島は、古代から現在まで発展し、継承されてきた神聖な島を崇拝する文化的伝統の類い稀な例である。注目すべきことに、沖ノ島に保存されてきた考古学的遺跡はほぼ無傷であり、そこで執り行われた祭祀が4世紀後半から9世紀末にかけての500有余年にどのように変化してきたかについて時系列的な記録を残すものとなっている。これらの祭祀では、大量の貴重な奉献品が島の様々な場所に納められており、祭祀の変化を証している。沖ノ島での直接的な奉献は9世紀に終わったが、島に對する崇拝は、大島や九州本島から沖ノ島へと開かれた眺望によって例示される「遙拝」とともに、沖ノ島の沖津宮、大島の沖津宮、辺津宮という宗像大社の三つの異なる信仰の場における宗像三女神への崇拝という形で継続した。

* 1
建築、科学技術、記念碑、都市計画、景観設計の発展に重要な影響を与えたある期間にわたる価値観の交流またはある文化圏内での価値観の交流を示す。

* 2
現存するか消滅しているかにかかわらず、ある文化的伝統または文明の存在を伝承する物証として無二の存在（少なくとも希有な存在）である。

↓この本は、世界遺産としての価値やその理解のための背景をもっと知りたい人に分かりやすく紹介するために制作しました。

古代祭祀と対外交流

「神宿る島」 沖ノ島



自然崇拜とカミ

古代の日本人は、自然物や自然現象に神秘的な霊力（カミ）が宿っていると考え、畏敬の念を抱きました。「カムナビ」（神のいるところ）と言われる、均整な笠状の外観をもつ沖ノ島は、日本列島と朝鮮半島との間の航海の道標でもあり、古来周辺の海域を行き来した宗像地域の人々が、カミの存在を見出したものと考えられます。

現代まで奇跡的に守られてきた沖ノ島の祭祀遺跡では、4世紀から9世紀の約500年にわたる、自然崇拜を基盤とした祭祀の痕跡が確認できます。



島は対馬暖流の影響により温暖で、ピロウやオオタニワタリといった亜熱帯植物が生育し、常緑広葉樹高木林で覆われている。希少な鳥類や植物類も数多く、島全体が国の天然記念物「沖の島原始林」に指定されている。

構成資産

沖ノ島・小屋島・御門柱・天狗岩
(宗像大社沖津宮)



「沖ノ島図」福岡市博物館蔵

17世紀後半～18世紀前半頃に第4代福岡藩主黒田綱政によって描かれた。彩色を施された最も古い沖ノ島の絵図で、社殿の様子や島の手前の岩礁などが見てとれる。



小屋島、御門柱、天狗岩(右から)

ています。
 沖ノ島は周囲約4 km、面積約68・38 ha、最高所の標高は243 mで、島そのものが信仰の対象となっています。島の南東約1 kmにある三つの岩礁は、沖津宮にとって天然の鳥居の役割を果たすもので、今でも沖ノ島に向かう船は、これらの間を通って行きます。

九州北部の宗像地域(本土)

から60 km離れた沖ノ島と、その付随する岩礁がんしょうの小屋島、御門柱、天狗岩からなる信仰の場を宗像大社沖津宮と言います。宗像大社の三宮の一つで、宗像三女神のうち田心姫神がまつられ

九州北部から朝鮮半島へと向かう海域に位置する沖ノ島では、4世紀後半から日本と中国大陸、

朝鮮半島の各古代王朝との交流が活発になると、航海の安全を願う祭祀が執り行われるようになりました。

発掘調査によって見つかった22カ所の祭祀遺跡は、主にその立地によって4段階に遷りうつり変わることが明らかにされており、このような変遷を示す祭祀遺跡は他にありません。その祭祀は大規模なもので、宗像地域を支配した古代豪族、宗像氏だけによるものではない、「国家的祭祀」だったと考えられています。調査では、約8万点もの豊富で質の高い奉獻品が見つかり、全てが国宝に指定されています。対外交流によってもたらされた貴重な品々も含まれ、沖ノ島は「海の正倉院」とも呼ばれます。



巨岩群に残された祭祀遺跡

古代祭祀遺跡と宗像大社沖津宮の本殿は、標高80〜90mの沖ノ島中腹にある、巨岩が集中している部分に位置します。

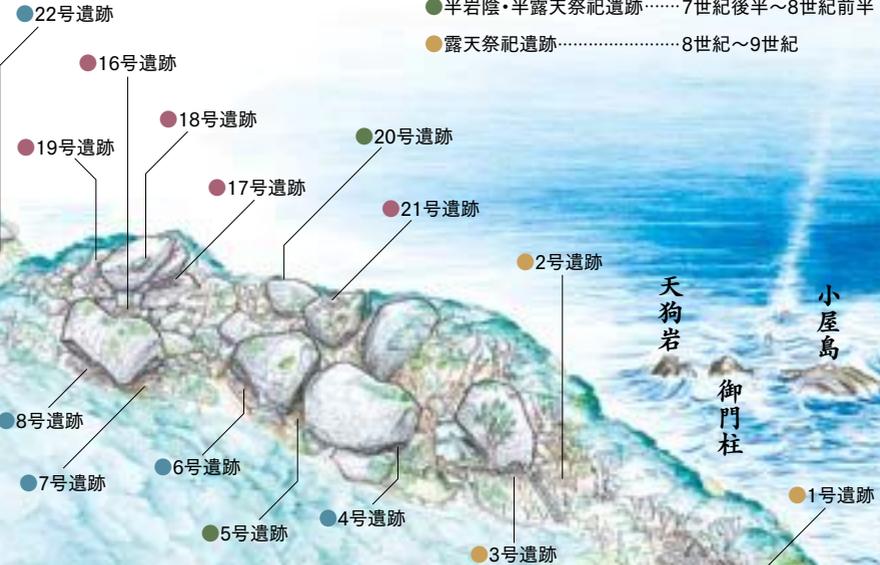
カミが宿る自然物をまつるこ
とこそが日本列島の古い祭祀の
あり方で、岩や木などを対象に
してカミをまつった聖域が「神
社」だったようです。海上から
は島そのものにカミが宿ると考
えられ、島内では巨岩をカミの
宿る対象としてまつりが行われ
たのでしょう。三輪山みわやまを「神体
とする奈良県の大天神社おおかみしんじやなど、
現在でも本殿を設けていない神
社がありますが、沖ノ島の祭祀

遺跡もそのような神社の起源を
伝えるものです。

沖ノ島の祭祀遺跡の位置は巨
岩の上に始まり、巨岩の陰、そ
して露天の平坦地へと移り、そ
れにあわせてカミに捧げられた
奉獻品の種類も変化していきま
す。一方で、鏡が祭祀に用いら
れ続けることなど、当初から変
わらない部分もあります。

文献からでは知ることのでき
ない、古代の祭祀の変遷や各時
期の対外交流のあり方を今に伝
える沖ノ島祭祀遺跡は、まさに
かけがえのない存在です。

- 岩上祭祀遺跡……………4世紀後半〜5世紀
- 岩陰祭祀遺跡……………5世紀後半〜7世紀
- 半岩陰・半露天祭祀遺跡……7世紀後半〜8世紀前半
- 露天祭祀遺跡……………8世紀〜9世紀



イラスト／北野陽子



対外交流を物語る奉獻品とその由来

航海の安全と交流の成功を求めて

沖ノ島祭祀遺跡は、海を渡らなければ異国とつながることのない日本にとって、交流のための航海がいかに重要なことであつたかを教えてくれます。

沖ノ島での古代祭祀は、4世紀後半に、倭（ヤマト王権）と朝鮮半島の百済との交流が活発になったことを契機に始まりました。古代東アジアの諸国は、中

国の諸王朝からこぞつて文物を採り入れましたが、倭と朝鮮半島との間にも様々なレベルの交流がありました。この時代に大陸からもたらされた文化や品々は、政治や社会、信仰など、あらゆる面の発展に貢献し、日本文化の基礎となっています。

奉獻品には他にほとんど見つからない大変貴重な舶載品も含まれており、シルクロードを通じて運ばれてきたペルシア（イ

ラン）産のガラス碗片などはその代表です。一方、中国の施釉陶器（うわぐすりで色をつけた陶器）である唐三彩の技術を採り入れて、8〜9世紀に日本で作られた奈良三彩小壺や、中国にならつて日本で発行された古代銭貨の二つ「富寿神宝」（818年に初めて鑄造）は、日本への文化や技術の流入を物語ります。

沖ノ島への信仰から生まれたと考えられる宗像三女神は、このような大変重要な航路の守り神として、国家から丁重な待遇を受ける存在でした。日本最古の正史『日本書紀』には、「海北道中」に鎮座する「道主貴」、つまり九州北部から朝鮮半島へと向かう海の道を守る高貴な神として、国家（歴代の天皇）を助け、国家から祭祀を受けるようにと記されています。

岩上祭祀遺跡



17号遺跡。21面もの鏡を上向きに重ね、岩の間に納めた状況が確認された。

4世紀後半、沖ノ島でも最も古い段階に属する祭祀遺跡の一つである17号遺跡では、巨岩の上の岩の隙間に21面もの銅鏡が整然と納められていました。その鏡の多さは、祭祀へのヤマト王権の関与を物語っています。鏡は全て鏡面を上に向けて重ね

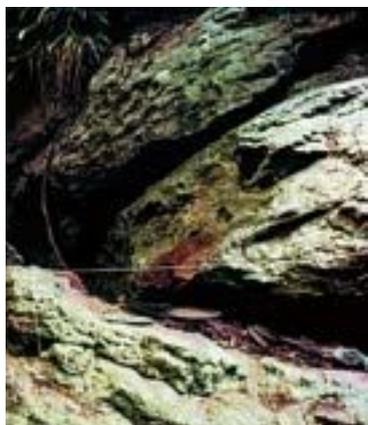


だりょう 鏡(直径23.7cm)



ほうかくま 鏡(直径27.1cm)

17号遺跡(横から)

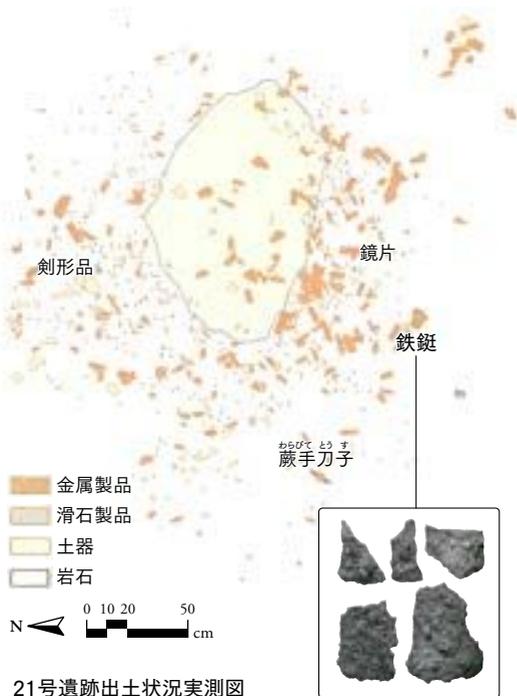


られ、その上に石が載せられていました。鏡は弥生時代に中国から伝わって以来、日本列島で祭祀用品として重視されてきたものです。

その他に見つかった鉄剣などの武具や勾玉などの玉類といった品々は、当時の古墳に副葬された品々と共通します。鏡・剣・玉の組み合わせは日本神話に登場する「三種の神器」と一致し、それらは日本で後世まで長く祭祀で用いられるものです。

5世紀代の21号遺跡では、巨岩の上の大きな石を、小さな石で四角形に囲った祭壇が検出されました。巨岩の上の小さくぼみからは滑石製の白玉が発見されていて、白玉の穴に紐を通して木の枝にかけ、その枝を大きな石に立てかけて祭祀を行っていたと考えられています。また、

鉄錠（鉄の素材）の存在からはヤマト王権が朝鮮半島から入手していた貴重な鉄素材をカミに捧げたことが分かります。なお、21号遺跡から出土した銅鏡と同型の鏡が宗像地域の首長の墓（福津市勝浦峯ノ畑古墳）からも出土していて、沖ノ島の祭祀に宗像氏が関与していたことを物語っています。



21号遺跡出土状況実測図

千数百年の時を超えて現れた
古代祭祀の様子



21号遺跡。中央の大石を石で囲んだ祭壇を調査時に復元した状況。

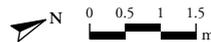


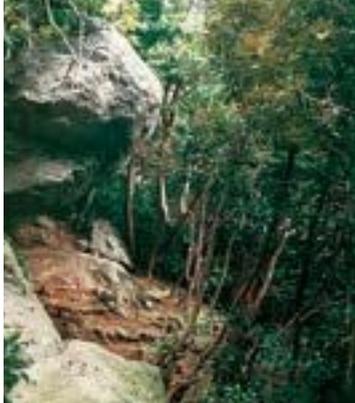
巨岩の右が7号遺跡、左が8号遺跡。1954年の調査時の様子。



岩陰祭祀遺跡

7号遺跡出土状況実測図





22号遺跡。石組みによる祭壇が設けられ、岩陰の外にも須恵器が並べられていた。

5世紀後半以降になると、遺跡の位置は巨岩に覆われた陰の部分へと移ります。石で囲って祭壇を設けた形跡などが発見されていて、奉獻品には鉄製の武器や刀子・斧などのミニチュア製品、金銅製の馬具などがあります。

7号遺跡や8号遺跡からは、装飾性の高い金銅製馬具や金製指輪など、朝鮮半島の新羅に由来するとみられる品々や、ペルシア（イラン）製のカットグラ

ス碗片などが発見されています。特に、金製指輪は新羅の王陵から出土したものと非常によく似ています。乗馬の風習は古墳時代に朝鮮半島から伝わりましたが、金メッキできらめく馬具も、透き通るカットグラスの器も、それまでの日本にはなかったものです。危険な海を越えて対外交流を行った古代の人々は、これらの「宝物」をお供えしてカミに祈りを捧げたのです。

岩陰祭祀遺跡の中でも最も新しい7世紀代の遺跡とされる22号遺跡では、奉獻品に変化が見られます。石組で区切った範囲に、土器や金銅製の雛形紡織具（糸をつむぐための道具のミニチュア）など、祭祀のためだけに作られたものが納められていました。古墳の副葬品、つまり葬儀に用いられた品々との共通性が薄れてきたと考えられています。



22号遺跡。石囲いの中に多数の金銅製の紡織具などが埋納され、新たな祭祀の出現をうかがわせる。

半岩陰・半露天祭祀遺跡

7世紀後半、わずかに岩陰にかかる5号遺跡では、祭祀のために作られた奉獻品が目立ちます。紡織具、人形、五弦琴などの様々な金銅製雛形（ミニチュ

ア）品は、伊勢神宮の神宝と共通します。現在まで続く日本固有の信仰における祭祀の基盤となった古代国家（律令国家）によるまつりの形が、この頃に確立されたことを示しています。

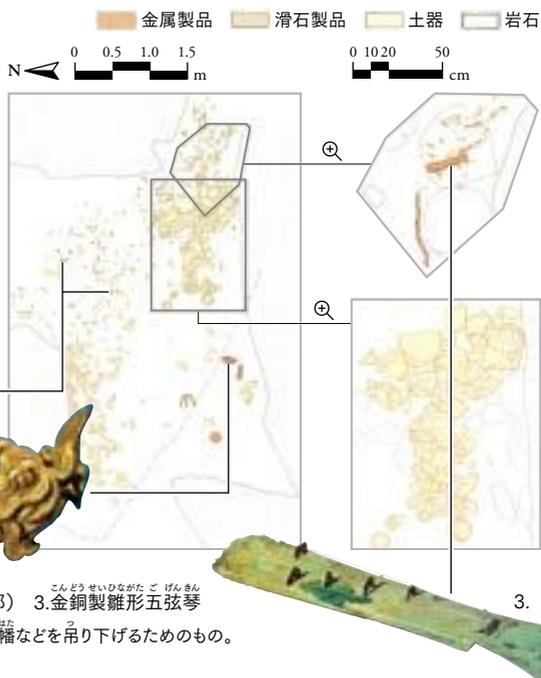
一方、金銅製龍頭や唐三彩片は、遣唐使が中国からもたらしたものと考えられています。この時期、

5号遺跡。調査では、祭祀で土器が実際に並べられた様子が判明した。

長い分裂状態にあった中国大陸は隋によって統一され、代わった唐も周辺に勢力を振るいました。ヤマト王権は隋・唐に使節を送り交流に努めました。朝鮮半

島で百済が減ばされると、663年に唐・新羅軍と戦って大敗します。その後、王権は唐を手本とした中央集権国家の確立に全力を傾けるのです。祭祀の変容は、このような激動の東アジア情勢と国家の変革の中に位置づけられます。

5号遺跡出土状況実測図



1.金銅製龍頭 2.唐三彩長頸瓶片(口縁部) 3.金銅製雛形五弦琴

1は竿の先に付け、唇の孔から出た金具から、轆などを吊り下げるためのもの。

3は伊勢神宮の宝物と一致する。

露天祭祀遺跡



1号遺跡。大量の土器類などが現在も残されている。



滑石製舟形

奈良三彩小壺。唐三彩の技術をもとに日本で作られた。



8世紀から9世紀末頃までの約200年間は、巨岩群から南西に約30m離れた、海を望む平坦地に大量の奉獻品が残されました。1号遺跡では、祭壇状の石積遺構とともに、穴の開いた祭祀用の土師器・須恵器や、人形・馬形・舟形といった滑石製形などが見つかりました。これらは宗像地域独特の形状や材質で作られており、古代国家の新しい祭祀制度の下で、地域

の伝統を残した祭祀が定期的に行われていたようです。

同じ頃、宗像地域では、大島の御嶽山祭祀遺跡、九州本土の下高宮祭祀遺跡でも、7世紀後半までに、沖ノ島と共通する奉獻品を用いた祭祀が行われるようになりました。8世紀前半に成立した日本最古の歴史書である『古事記』や『日本書紀』の神話には、宗像氏が沖津宮・中津宮・辺津宮で宗像三女神をまつっていると記されており、この沖津宮は沖ノ島、中津宮は大島の御嶽山、辺津宮は九州本土の下高宮の各祭祀遺跡にあたります。

この宗像三女神は、沖ノ島に宿るカミが人格化された存在と考えられます。沖ノ島に対する自然崇拜と宗像三女神への信仰は並存しながら、宗像地域の信仰の基盤として受け継がれていきます。

沖ノ島祭祀遺跡の奉獻品の変遷

対外交流を反映する奉獻品



銅鏡(中国鏡)



鉄鋌



金銅製馬具



カットグラス碗片



金製指輪



金銅製龍頭



唐三彩
長頸瓶片



富寿神宝



奈良三彩

勾玉



滑石製品



銅鏡(倣製鏡)

鉄製武器



土器



金銅製雑形

鉄製雑形



滑石製形代

銅製雑形

遺跡形態

岩上祭祀遺跡

岩陰祭祀遺跡

半岩陰・半露天

露天祭祀遺跡

<表> 沖ノ島祭祀と奉獻品の変遷

中国		朝鮮半島		日本	西暦	出来事
西晋	高句麗	馬韓	辰韓	弁韓	313	高句麗、朝鮮半島北部の楽浪郡を滅ぼす この頃より、朝鮮半島では馬韓から百済が、辰韓から新羅が興る
					369	倭、百済と結び、新羅と交戦
五胡十六国	東晋	百済	新羅	加耶	372	百済王の太子、倭王に七支刀を贈る
					391	倭、朝鮮半島に出兵(高句麗好太王碑)
北魏	宋	齊	梁	古墳時代	421	倭王讃、南朝の宋へ入貢する 倭の五王(讃、珍、済、興、武)が宋へ使者を派遣する(478年までに9回派遣)
					475	高句麗、百済を攻撃。百済王は戦死し、首都漢城(ソウル)が陥落する
西魏	東魏	北齊	陳	飛鳥時代	478	倭王武、宋の皇帝へ使者を送り、高句麗の脅威から百済を守るための 軍事的な援助を求め
					512	加耶四県を百済に割譲
北周	北齊	陳	隋	飛鳥時代	513	百済、倭へ五経博士を贈る
					538	仏教伝来。百済が倭へ仏像と経典を贈る
唐	統一新羅			奈良時代	554	倭、百済両軍が新羅と戦う
					562	新羅、加耶諸国を滅ぼす
				飛鳥時代	571	遣新羅使(この後882年までに40回遣使)
					588	百済、倭へ仏僧や技術者を贈る
				飛鳥時代	600	初めて遣隋使を派遣する(この後614年までに6回遣使)
					602	百済僧観勒、倭へ曆本、天文地理などを伝える
				飛鳥時代	608	遣隋使小野妹子が隋の使いとともに帰国し、再び留学生とともに隋に派遣される
					610	高句麗僧が倭に紙、墨、絵具の製法を伝える
				飛鳥時代	630	初めて遣唐使を派遣する(この後838年までに16回派遣)
					654	胸形君德善の娘、尼子娘が大海人皇子との間に高市皇子を産む
				奈良時代	663	白村江の戦い(倭、百済の連合軍が唐、新羅の連合軍に大敗)
					676	新羅が、朝鮮半島を統一する
				奈良時代	701	大宝律令完成
					712	『古事記』成立
				奈良時代	720	『日本書紀』成立
					723	宗像郡が全国八つの神郡のうちの一つとして史料に見える
				平安時代	753	中国僧鑑真来日
					870	新羅海賊の活動の脅威により、宗像神に対して
				平安時代	878	海上の安全を祈るための使者が朝廷から派遣される
					894	唐への遣使計画が中止される。この頃には、中国や朝鮮半島への遣使は行われなくなる



宗像大社沖津宮本殿・拝殿。1932年に再建されたものだが、巨岩と巨岩の間の空間にびったり収まるように設計されている。

信仰と禁忌が守った「奇跡の島」

古代祭祀が行われなくなった10世紀以降も、沖ノ島は宗像大社沖津宮として、「神宿る島」として受け継がれてきました。

露天祭祀遺跡の近くには、中の土師器が散乱している所があり、中世の「御長手神事」(56頁参照)などの神事に関わるものとみられます。江戸時代の17世紀までに設けられた沖津宮の社殿(古代とする説もある)は、古代祭祀が行われた巨岩群の間に位置しており、元来の自然崇拜の考え方が継承されてきたことを物語っています。

また江戸時代には、入島を厳しく制限する禁忌などの慣習が人々の間に根付いていました。左記の禁忌の他にも、島内で四足の動物を食へてはいけない、縁起の悪い言葉は「忌み言葉」

として別の言葉で言い換えるといった禁忌があり、沖ノ島への畏敬の念は今も強く受け継がれています。

これらの信仰に基づく伝統によつて、古代祭祀遺跡や島の豊かな自然は、ほぼ手つかずの状態で守り伝えられてきたのです。第2次世界大戦後、宗像大社の歴史を明らかにするために沖ノ島の学術調査が行われました。祭祀遺跡からは大発見が相次ぎ、その学術的価値は広く知れ渡りました。古代オリエント史を専攻した三笠宮崇仁親王は、第3次調査中の1969年に沖ノ島を訪れ、「20世紀の奇跡がおこった島」と評しています。それはまさに、時を超えた信仰の力が生んだ奇跡と言えるでしょう。

—— 沖ノ島の禁忌 ——

「不言様」
おいわずさま

沖ノ島で見たり聞いたりしたものは一切口外してはならず、人々は沖ノ島を「不言様」「不言島」とも呼び、畏敬の念をもって現代まで守り伝えてきました。

「一木一草一石たりとも
持ち出してはならない」

沖ノ島からは一切何も持ち出してはならないとされ、江戸時代にはこれを破ったことにより祟りがあったという伝承があります。そのため、沖ノ島の古代祭祀遺跡はほぼ手つかずの状態です。

「上陸前の袂」
みそぎ

沖ノ島へ上陸することは通常認められていません。上陸を許された場合や、日々奉祀を行っている神職であっても、必ず始めに着衣を全て脱いで海に浸かり心身を清めなければ、島内へ入ることは許されません。

沖ノ島秘話

宗像大社神宝館に、沖ノ島の神宝と伝えられる金銅製の織機の雛形がある（写真）。非常に精巧にできており、実際に織ることもできるという。伊勢神宮の神宝にも共通した織機がある。

初代福岡藩主の黒田長政は、沖ノ島に神の宝がたくさんあるとの噂を耳にし、これを持ってくるように命じた。しかし、禁忌があるため誰も従おうとしなかったという。結局長政は博多のキリシタンに「金の機物」などの宝を持ってこさせたが、程なくして城内の倉の中で宝が鳴動し、光が飛び出すなどの「祟り」が起こった。恐れた長政は宝を元通りに島に返したという。

この逸話は沖ノ島の禁忌の存在を伝える最も古い文献記録となっている。神宝館に伝わる織機も、この時長政から返却されたものである可能性がある。



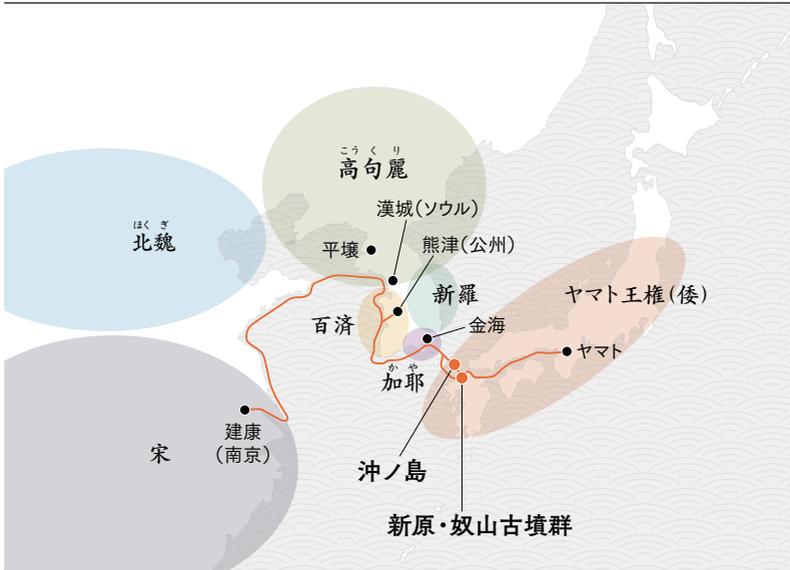
古代の航海と沖ノ島

沖ノ島の古代祭祀が始まった4世紀後半から朝鮮半島との交流が活発になり、5世紀には倭の五王によって、朝鮮半島西海岸の百済を介して中国南朝への遣使が行われました。古墳時代の当時、日本から大陸に向かった船は、縄文時代以来の丸木舟の両舷(両側)に、高い板を貼りつけて波よけとした準構造船と呼ばれる船だったと考えられます。動力はほぼ手漕ぎによるもので、船底は丸太をくり抜いたものだったので、船の大型化には限界がありました。

九州北部から朝鮮半島への航路については、「魏志倭人伝」にも記される沓岐・対馬を経由するルートが最も安全で一般的なものだったとみられますが、玄界灘の海流を考慮すると朝鮮半島側から沖ノ島近海を通って宗像に至ることは十分考えられるようです。

その後、新羅が朝鮮半島を統一した7世紀後半以降は、九州の西から東シナ海を直接横断して中国に遣唐使が派遣されました。また、新羅との間にも定期的に使節が往復しました。遣唐

5
〜
6
世紀



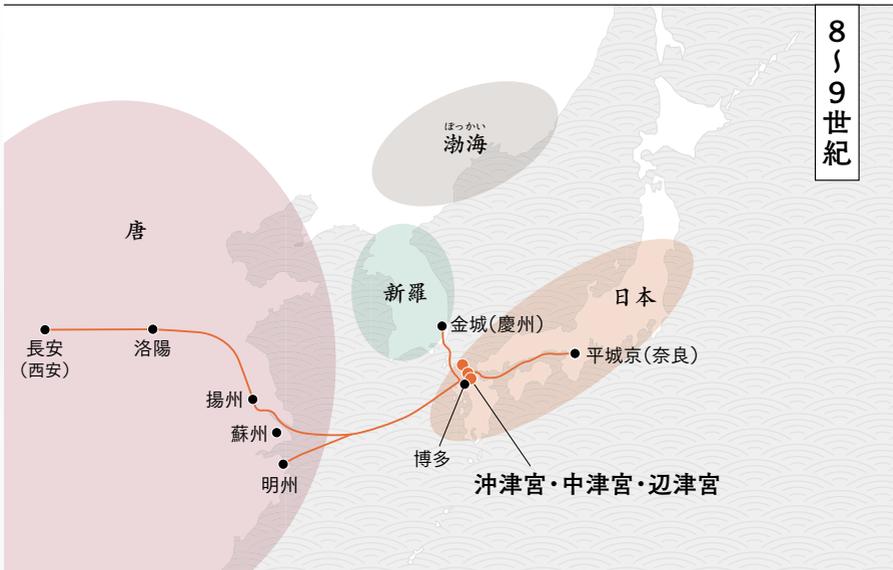
西都原古墳170号墳出土の
埴輪船(復元品、宮崎県立
西都原考古博物館蔵)。櫂
を引っかけるための突起が
表現されている。



使船には、板材を組み合わせて作られた、百人以上が乗船できる構造船が用いられました。動力も手漕ぎに加えて、帆を補助的に利用するようになったようです。それでも風に巻き込まれるなどして、かなりの割合で遣唐使は遭難・漂流したことが記録に残されています。

東シナ海を渡る遣唐使船が沖ノ島に立ち寄ることはなかったでしょうが、沖ノ島の祭祀は遣唐使の時代にも続いています。既に国家的な海の守り神として、宗像三女神は篤い信仰を受けていたのでしょう。海を越えた交流は沢山の物品や文化をもたらしますが、常に危険と隣り合わせだった航海の安全を祈る想いや、無事に帰還できた際の神への感謝の気持ちは、常に変わることはなかったことでしょう。

8 〜 9 世紀



構成資産

新原・奴山古墳群

「神宿る島」沖ノ島

- 新原・奴山古墳群
- 旧入海範囲
- 津屋崎地域の主な古墳



新原・奴山古墳群は、現代まで続く沖ノ島に対する信仰の伝統を築いた古代豪族、宗像氏の墳墓群です。5世紀から6世紀にかけて、前方後円墳5基、円墳35基、方墳1基の計41基の古墳が、沖ノ島へと続く旧入海を見渡す台地上に築られました。沖ノ島の古代祭祀は、古代国家（ヤマト王権）が関与した「国家的祭祀」でしたが、宗像地域の人々の沖ノ島への信仰がその基礎にあり、高度な航海技術を持った宗像氏の協力なくしては行うことはできませんでした。『古事記』や『日本書紀』に記されているように、宗像大社の三つの宮で宗像三女神をまつるようになるのが宗像氏です。

古代から海とともに生き
信仰の伝統を育んだ宗像の人々





古墳群築造時のイメージCG

沖ノ島はちょうど大島の向こう側にあたる。

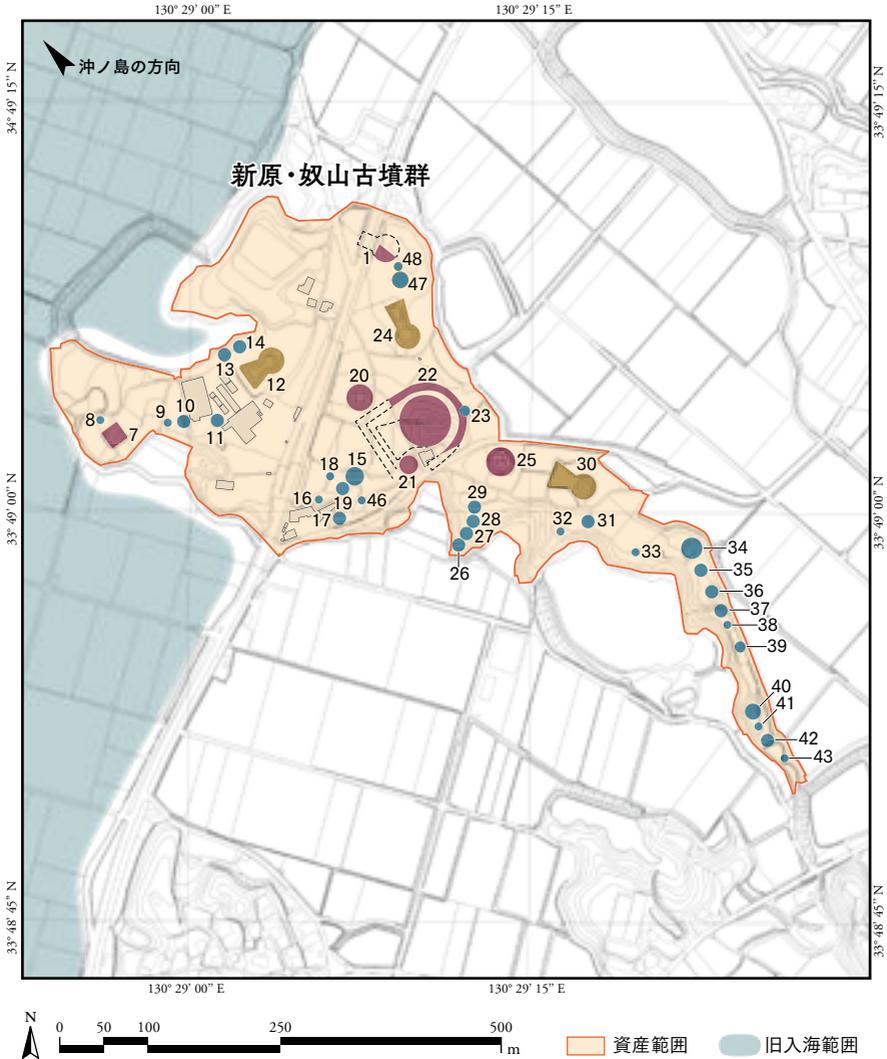
宗像地域では、沖ノ島祭祀が始まる4世紀後半に、それまでの古墳とは一線を画す規模を持つ前方後円墳である東郷高塚古墳が、宗像市の釣川の中流域に造られます。5世紀になると、福津市北部の沿岸部、旧入海の東側にあたる海を望む台地上に、7世紀中頃まで古墳群が連綿と築かれていきます。全長70〜100m程度の前方後円墳を含むこれらの古墳群（国指定史跡「津屋崎古墳群」）は、古代豪族

宗像氏の首長や有力者の墓とみられます。その中でも新原・奴山古墳群は、5世紀から6世紀という比較的長期にわたって、旧入海に面した一つの台地上に大小様々な墳墓が集中して築かれています。海を越えた対外交流に従事し、沖ノ島に対する信仰の伝統を担い育んだ宗像氏のあり方を最もよく物語っていると云えるでしょう。

宗像地域の主な古墳

名称	同時期の沖ノ島▶				岩上祭祀遺跡				岩陰祭祀遺跡				半岩陰・半露天		規模※
	4世紀	5世紀	6世紀	7世紀	4世紀	5世紀	6世紀	7世紀	4世紀	5世紀	6世紀	7世紀	4世紀	5世紀	
新原・奴山古墳群						■	●	●	●	●	●	●			80m (22号墳)
東郷高塚古墳		●													64m
勝浦峯ノ畑古墳						●									100m
勝浦井ノ浦古墳							●								70m
生家大塚古墳										●					73m
須多田天降天神社古墳											●				80m
須多田下ノ口古墳												●			82m
在自剣塚古墳													●		102m
手光波切不動古墳														●	25m
富地嶽古墳														●	35m

※「規模」は、前方後円墳は全長、円墳は直径の長さ



大型の前方後円墳（22号墳）、中型の前方後円墳（1号墳）、中型の円墳（20、25号墳）は5世紀後半に、中型の前方後円墳（12、24、30号墳）は6世紀前半、台地の縁辺部の小型の円墳群は6世紀後半に築かれたもの。そのほとんどが良好な保存状態にある。

新原・奴山古墳群平面図

新原・奴山古墳群一覧表

古墳番号	墳形	規模(m)	
1	前方後円墳	50	墳長
7	方墳	24	一辺
8	円墳	10	直径
9	円墳	6	直径
10	円墳	12	直径
11	円墳	14	直径
12	前方後円墳	43	墳長
13	円墳	14	直径
14	円墳	14	直径
15	円墳	20	直径
16	円墳	10	直径
17	円墳	11	直径
18	円墳	10	直径
19	円墳	11.5	直径
20	円墳	30	直径
21	円墳	17	直径
22	前方後円墳	80	墳長
23	円墳	12	直径
24	前方後円墳	53.5	墳長
25	円墳	36	直径
26	円墳	17	直径
27	円墳	15.5	直径
28	円墳	15	直径
29	円墳	12	直径
30	前方後円墳	54	墳長
31	円墳	13	直径
32	円墳	10	直径
33	円墳	8	直径
34	円墳	24	直径
35	円墳	13	直径
36	円墳	17	直径
37	円墳	14	直径
38	円墳	9	直径
39	石室のみ現存		
40	円墳	17	直径
41	円墳	10	直径
42	円墳	11.5	直径
43	円墳	9	直径
46	円墳	7	直径
47	円墳	19	直径
48	円墳	9.5	直径



22号墳



25号墳



12号墳

古代豪族宗像氏

新原・奴山古墳群に代表される津屋崎古墳群に葬られた宗像氏の歴代の首長たち。その後、7世紀後半からは宗像三女神を

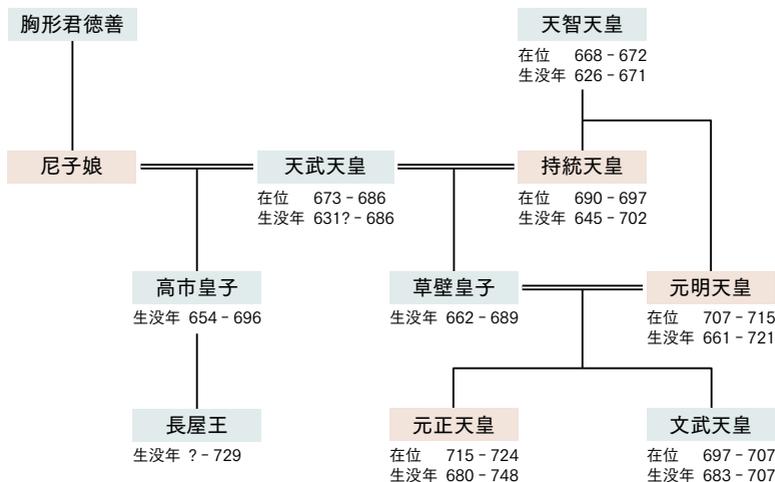
まつる重要な地方氏族として、代々歴史書に名を連ねるようになります。

首長は宗像郡の長官である大領と宗像大社の祭祀を司る責任者である宗像神主の座を兼任し、さらには地方氏族ながら五位の位を朝廷から授かるなど、出雲国造に匹敵するほどの特別な待遇を受けました。また宗像郡は、伊勢や出雲など、古代日本で八つしかない「神郡」の

一つとされ（西海道＝九州では唯一）、大領以下の郡司の役職を一族で独占することも認められていました。

こうした背景にはもちろん沖ノ島、宗像三女神が重要視されたことがありますが、宗像氏が天皇家との密接な関係を築いていたことも見逃せません。天武天皇の第一皇子の高市皇子を産んだのは、7世紀後半の宗像氏の首長、胸形君徳善の娘の尼子娘という女性でした。高市皇子は壬申の乱（672年）で活躍し、その息子の長屋王は奈良時代前半に朝廷で権力を握

天皇家・宗像氏関係系図(7世紀後半～8世紀初め)



古代文献史料に見える宗像氏の首長

姓名	位階	登場年代
胸形君徳善		7世紀後半
むなかたのあそんとど 宗形朝臣等杼	外従五位上	709年
宗形朝臣鳥麻呂	外従五位下 外従五位上	729年 738年
宗形朝臣与呂志	外従五位下	745年
宗形朝臣深津	外従五位下	767年
宗形朝臣大徳	外従五位下	778年
宗像朝臣池作	外従五位下	798年
宗形朝臣秋足	外正七位上	828年
宗形朝臣勝麿	外従五位下 外従五位上	817年 828年



(右)京御苑内の宗像神社。藤原冬嗣の子孫である花山院家の邸宅内で代々まつられてきた後、現在地に移った。

(左)長屋王家木簡(平城京跡出土。奈良文化財研究所蔵)。その年代からみて、送り主の「宗形郡大領」は宗形朝臣等杼であろうか。

ります。奈良の長屋王の邸宅跡からは「宗形郡大領鯛醬」などと記された木簡が出土しています。祖母の実家の宗像からはるばる平城京まで、鯛の加工品(魚醬もしくは醬漬けか)などが献上されていたのです。その後、中央では藤原氏が権力を握るようになり、9世紀になると宗像氏は藤原氏に接近したようです。撰閑家の基礎を築いた藤原冬嗣は宗像三女神を邸宅内に勧請し、代々信仰したと伝えられます。その三女神は今、千年の時を経て京都御苑内の宗像神社でまつられています。

宗像地域の生きた伝統

宗像三女神と

信仰の継承

7世紀後半には沖ノ島と共通する祭祀が大島の中津宮や本土の辺津宮でも行われるようになり、約60kmに及ぶ広大な空間に展開する三つの宮からなる宗像大社が成立します。それぞれの宮が古代祭祀遺跡を起源とし、社殿を主な祭祀の場とする宗像三女神への信仰の場として、現代に続いています。沖ノ島に対する信仰の伝統は、宗像三女神信仰として現代に継承されていくのです。

また、大島の北岸に設けられた沖津宮遙拝所は、禁忌によって守られてきた沖ノ島を遥拝する伝統を示しています

宗像大社沖津宮(沖ノ島)
祭神 田心姫神

沖ノ島出土の
滑石製舟形

大きく入海が広がっていた宗像地域の人々は海とともに栄え、ほぼ一直線上に並ぶ祭祀の場は三宮からなる宗像大社となった。

宗像三女神誕生神話

皇祖神アマテラスの弟のスサノヲは、根の国（地下の国）へ行くように命じられたため、別れのあいさつをしにアマテラスが支配する高天原^{たかまがはら}へと向かった。しかし、アマテラスは弟が国を奪いに来たのではないかと疑ったので、身の潔白を証明するため、子を生んで当否を決める占い（誓約^{うげい}）をすることになった。アマテラスはスサノヲの剣を三つに

折り、井戸ですすぎ、噛み砕いて口から吹き出した。その息吹の霧の中から生まれたのが宗像三女神で、はじめに生まれた田心姫神は沖津宮に、次に生まれた湍津姫神は中津宮に、最後の市杵島姫神は辺津宮にそれぞれ降臨し、今は胸肩君（宗像氏）がそれらの神々をまつている。

※『古事記』『日本書紀』に基づきますが、複数の所伝があって細部にはそれぞれ相違があります。



構成資産

宗像大社中津宮

宗像大社中津宮は、宗像市神湊から約7km、沖ノ島から約48km離れた大島にあります。宗像大社を構成する三宮の一つで、宗像三女神のうち湍津姫神がまつられています。

大島で最も高い御嶽山山頂（標高224m）には、摂社の御嶽神社と御嶽山祭祀遺跡があり、その麓に中津宮の本殿・拝殿が建てられています。山頂での古代祭祀が行われて以降、麓に社殿が建てられ、山頂の御嶽神社（上宮）と麓の本殿（本社）が並存する現在のような境内が形成されました。これらは御嶽山に登る参道で結ばれており、16世紀の文献や江戸時代の絵図など

から確認できます。本殿・拝殿だけでなく、御嶽山祭祀遺跡、御嶽神社と参道を含む空間全体が宗像大社中津宮の範囲です。

御嶽山祭祀遺跡では、7世紀後半から9世紀末頃にかけて古代祭祀が行われ、沖ノ島祭祀遺跡と共通した奉獻品が出土しています。奈良三彩や金銅製の琴の雛形品、滑石製形代などは同時期の沖ノ島の奉獻品と一致し、出土状況などから沖ノ島の方角へ向かって祭祀を行っていたことが判明しました。まさにこの場所が、「中津宮」として『古事記』や『日本書紀』に記されている宗像大社中津宮の起源だったのです。



宗像大社中津宮空撮



宗像大社中津宮平面図



御嶽山祭祀遺跡滑石製舟形出土土状況

AとFは奈良三彩小壺、BとGは祭祀専用の有孔土器ゆづりこ、CとHは金銅製容器、Dとは滑石製馬形。Eは琴状製品とされ、Jの雛形五弦琴と同様のものであったと推測される。



C.



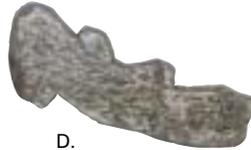
B.



A.



E.



D.

御嶽山祭祀遺跡出土品



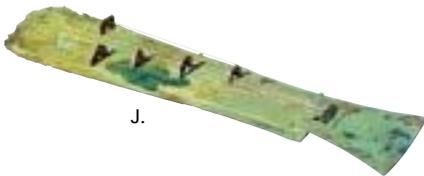
H.



G.



F.



J.



I.

沖ノ島祭祀遺跡出土品

中津宮境内を歩く

大島の南側、大島港からほど近くに、中津宮の一の鳥居が海に向かって立っています。大島に到着する渡船からもよく見え、海との深い関係がうかがわれます。境内の池の手前にある二の鳥居は寛文13年（1673）に建てられたもので、現存する宗像大社の鳥居の中では最も古いものです。

境内には「天の川」という川が流れ、この川をはさんで牽牛社・織女社があります。毎年8月7日には、大島で最も盛大なお祭りである七夕祭が行われますが、これは古く鎌倉時代まで遡るものです。

急な石段の上に鎮座する本殿は、17世紀前半頃に再建されたものです（福岡県有形文化財）。本殿に向かって左側から天の川の方へ道を下ると、「天の真名井」と呼ばれる清らかな湧き水があります。宗像三女神の誕生神話（35頁参照）に登場する天上の井戸にちなんで名づけられたものでしょう。

本殿の裏手からは、御嶽山の山頂へと険しい参道が続いています。山頂の展望台からは、北は沖ノ島を中心に壱岐、対馬など玄界灘を一望でき、南は宗像を中心に北九州市域から福岡市域までの九州本土が望めます。沖ノ島（沖津宮）と辺津宮は大島を介してつながっていて、大島は海上交通の拠点として大切な役割を果たしていたことが実感できるでしょう。



御嶽山山頂より沖ノ島(北側)を望む

信仰をつなぐ島

中津宮が鎮座する大島は、漁業を中心とする人口七百人ほどの島で、中津宮は島の人々の精神的支柱となっています。大島の人々は沖ノ島の周辺で漁を行い、沖ノ島とともに暮らしてきました。大島には沖ノ島を守り伝えてきた島、三宮の信仰がありません。

大島には、中世から一ノ甲斐二ノ甲斐という宗像大宮司家に属する社家が住み、江戸時代にも福岡藩主の保護の下、彼らによって信仰が代々受け継がれて

きました。中津宮の神事は二ノ甲斐河野家(越智家)が担い、一ノ甲斐河野家は、平時は自邸内に設けた祈禱所で沖津宮の神をまつり、年に二回、沖ノ島へ渡って神事も行っていました。18世紀初めまでに島の北岸に沖津宮遙拝所が設けられたのも、もともとは一ノ甲斐河野家が祭祀を行うためでした。

福岡藩士で学者の青柳種信は、寛政6年(1794)に外国船への警戒のため沖ノ島の「島守」に任命された際、大島で日々身を清めて、沖ノ島への出港の夕

御嶽山山頂より九州本土(南側)を望む



『筑前国続風土記附録』「大島図」(1797年。個人蔵)

中央には中津宮が鎮座する御嶽山、北側には沖津宮遙拝所、海の向こうに沖ノ島が描かれる。御嶽宮や沖津宮遙拝所へ向かう参道も描かれている。



現在の大島

イミングを待っていたことを書き残しています。

明治維新後、沖ノ島には宗像大社の神職が交代で島に常駐し、現在も神職1名が交代で奉仕しています。それを支えるのは絶好の漁場でもある周辺の海域で漁をしてきた宗像地域の漁師

たちです。彼らは沖ノ島への信仰も篤く、古くから「自分たちが島を守ってきた」という自負を持って、献魚などをして豊漁や漁の安全などを願っています。沖ノ島や宗像三女神への信仰を語る上で、大島は特に欠かすことのできない島なのです。

構成資産 宗像大社辺津宮

宗像大社辺津宮は、九州本土の釣川沿いに立地します。宗像大社を構成する三宮の一つで、宗像三女神のうち市杵島姫神が主神としてまつられていて、現在の宗像大社の神事を中心、宗像三女神信仰の拠点となっています。

境内は、かつては入海だった釣川を見下ろす丘陵（宗像山）の中腹に、古代祭祀が行われた下高宮祭祀遺跡があり、その麓に社殿群が建ち並んでいます。本殿・拝殿だけでなく下高宮祭祀遺跡を含む空間全体が宗像大社辺津宮の範囲です。

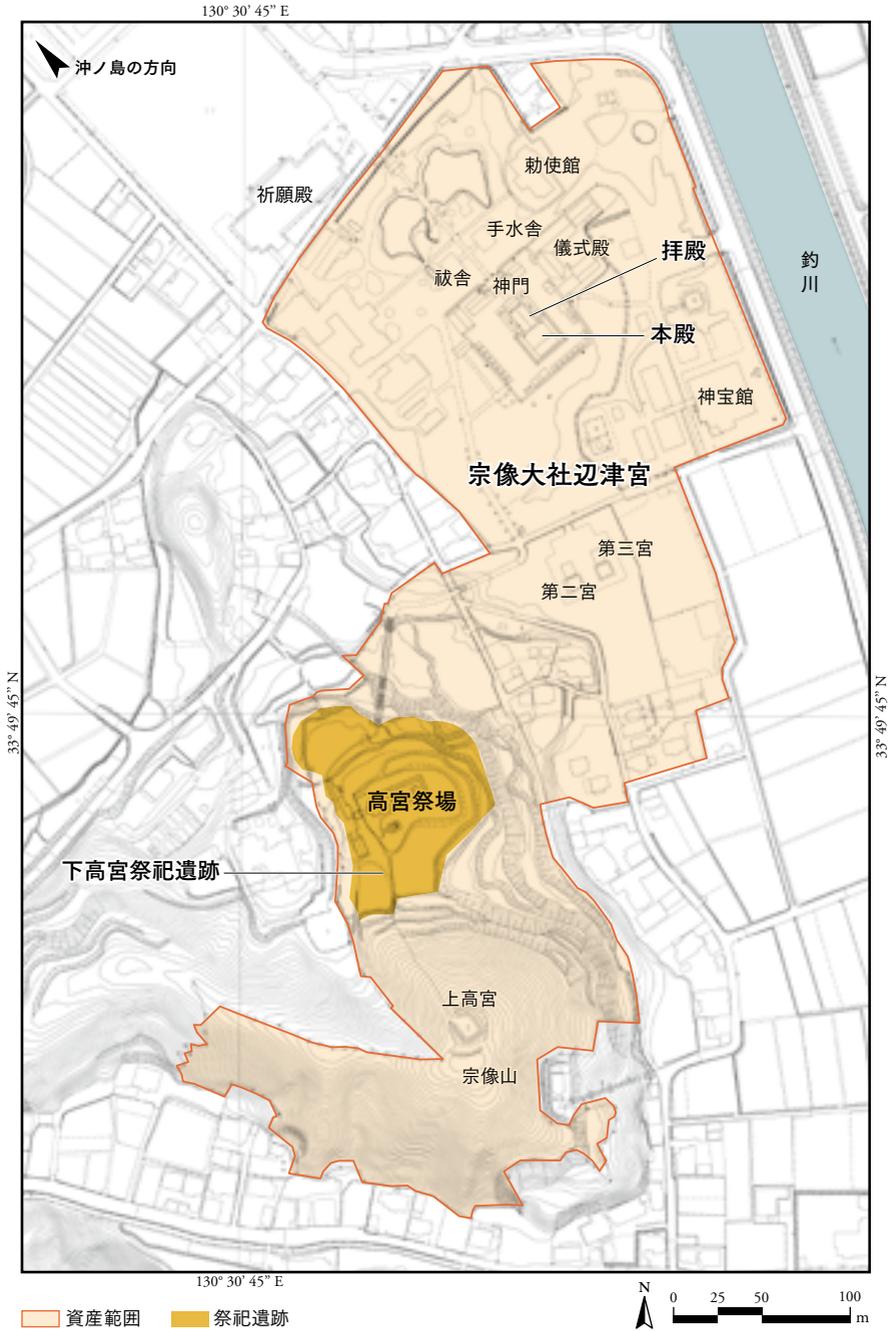
現在では田園風景の中にたたずむ辺津宮ですが、古代には近くまで入海が迫っていたようで、『日本書紀』では辺津宮は「海浜」と記されています。下高宮祭祀遺跡のある丘陵上からは、釣川や大島、玄界灘を望むことができます。現在は神域として立ち入りが禁止されていますが、宗像山の頂上（上高宮）からは沖ノ島も望むことができました。

現在では田園風景の中にたたずむ辺津宮ですが、古代には近くまで入海が迫っていたようで、『日本書紀』では辺津宮は「海



宗像大社辺津宮境内





宗像大社辺津宮平面図

辺津宮境内の歴史

下高宮祭祀遺跡からは、沖ノ島や大島の御嶽山から出土した奉獻品と共通する土器や滑石製品が数多く見つかっており、7世紀後半から9世紀頃、ここが祭祀の中心的な場だったことを物語っています。高宮の地は古くから信仰上重要な地とされてきており、遺跡範囲の一部は高宮祭場として整備され、現在も社殿を用いない神事が行われています。

辺津宮の社殿は、遅くとも12世紀には存在していたことが記録から分かっています。中世の境内の様子を伝える「田島宮社

頭古絵図」によれば、境内は釣川に接し、三女神をまつる第一宮・第二宮・第三宮をはじめとした社殿群が建ち並んでいました。現在の辺津宮本殿・拝殿にあたる第一宮では、沖ノ島（沖津宮）の田心姫神を中心に三女神を合わせてまつっていて、「惣社」とも称されていました。やはり沖ノ島が宗像大社の信仰の根源であったことがうかがわれます。

現在の本殿は1557年の焼失後、最後の大宮司家当主となった宗像氏貞が1578年に再建したもので、拝殿はその後筑

下高宮祭祀遺跡の一部は古代のまつりの場を再現した高宮祭場として整備され、秋季大祭の最終日（10月3日）の高宮神奈備祭や、毎月1日・15日の月次祭などの神事が行われている。





『筑前国続風土記附録』「宗像宮」(部分)
(1797年。個人蔵)
1675年の末社の整備後の境内が描かれている。



田島宮社頭古絵図
(17世紀前半頃。宗像大社神宝館蔵)
辺津宮を描いた最も古い絵図で、中世の境内の様子を伝えるもの。

江戸時代の1675年には、第3代福岡藩主の黒田光之によって、宗像郡内の宗像大社の末社が本殿を取り囲むように並べ建てられ、現在のような境内の構成となりました。この時に造営された末社の社殿は現在も残っており、辺津宮の境内を特徴づけています。またこの頃は釣川のある境内東側から本殿に向かう参道があったようで、かつての入海である釣川との深い関わりがうかがわれます。

前国を治めた小早川隆景が1590年に再建したものです(ともに国の重要文化財)。そして本殿に市杵島姫神、第二宮に沖津宮の田心姫神、第三宮に沖津宮の湍津姫神がまつられています。また、全国に広まった宗像神信仰の中心地であることから、辺津宮は「総社」とも称されています。



本殿を取り巻く末社群

中世の宗像地域には、通称「七十五末社」と言われるように、多数の末社が存在していた。宗像大宮司家の断絶後、荒廃していた末社をみかねた黒田光之が辺津宮境内に勧請・合祀した。

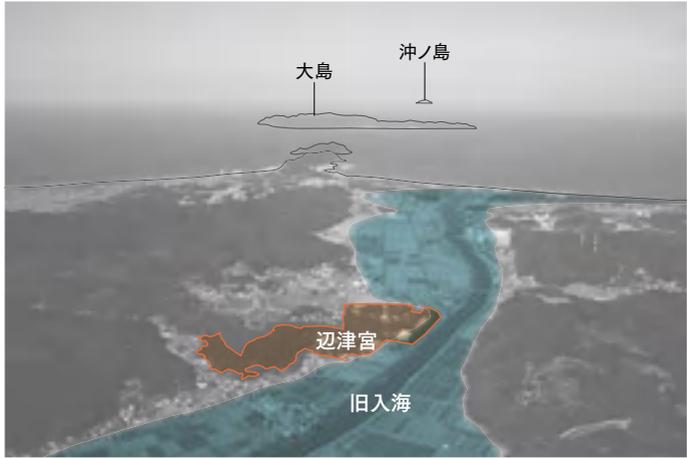


向かって右が第二宮、左が第三宮。社殿は、第60回式年遷宮(1973年)に際して、伊勢神宮の別宮の古殿舎が下賜され、第62回(2013年)の際にも修理がなされた。

宗像大社の復興のために

1942年、荒廃した宗像大社にもう一度輝きを取り戻すため結成された「宗像神社復興期会」(現宗像大社復興期会)。その中心人物は、宗像の旧赤間村出身で出光興産の創業者である出光佐三氏だった。氏は、物心両面の援助を惜みず、神社史の編纂、

沖ノ島祭祀遺跡の学術調査、昭和の御造営など、大社の復興のために献身的な努力を重ねた。功績はあまりに大きいにもかかわらず、その名は境内のどこにも残されていない。宮司が是が非でもお名前を残させてほしいとお願いしたが、畏れ多いと頑として拒むので、境内のどこか、決して人目につかない場所に名前を刻み、忍ばせたそうだ。



辺津宮の境内は元々入海に面していた。



宗像大社辺津宮周辺空撮

入海と宗像地域の古地形

福津市の勝浦潟かつうらがた（桂潟）と宗像市を流れる釣川は、かつては大きな入海でした。砂州によって形成された入海は天然の良港となり、海と陸とをつなぐ交通・物流の拠点として地域の繁栄を支えました。

宗像地域には、4世紀から7世紀にかけて築かれた約2800基もの古墳があり、その多くは入海に面した台地や丘陵上に位置しています。特に西の福津市側には、5世紀以降、宗像氏の首長墓が勝浦潟に沿うように連綿と築かれ、北部九州を代表する古墳群の一つである津屋崎古墳群を形成しています。入海に突き出るような台地上に

築かれた新原・奴山古墳群はその一部です。かつてこの海域を行き交った船からもこれらの古墳群はよく見え、地域を支配した宗像氏の存在を象徴するランドマークとなっていたことでしょう。

勝浦潟は、塩田や農地とするために大部分が江戸時代までに干拓されましたが、現在も広大な田園風景が往時の面影を伝えています。また、かつての入海のラインに沿って、船をつなぎ止めておくために使われた「舟つなぎ石」が今でもいくつか残されています。

東の宗像市側では、海面の高かった縄文時代には現在の宗像

昭和30年代の辺津宮周辺(『宗像神社史』上巻より)

左の宗像山から中央に伸びる森が辺津宮。かつての入海は水田となり、釣川の水害を避けるように山麓に集落が形成されている。





『筑前国続風土記附録』^{かつらだげ}「勝浦嶽^{ならびにうみのなかみち}并海中道」(1797年。個人蔵)
江戸時代の勝浦湾の風景。海岸の砂州は松原が続く「海中道」と呼ばれた景勝地であり、干拓地には塩焼きの煙が上り、外海とつながる津屋崎の港には帆船が集まる。

市中心部の釣川中流域まで海が入り込んでいたようです。入海は海面の低下と川の堆積作用、そして農地開発などによって次第に陸地となつていきますが、辺津宮はそのような入海に突き出た丘陵とその麓に立地していました。地形図からは、この場所は釣川の中・上流域と下流域、沿岸部とを結ぶ結節点にあたり、まさに宗像地域の人々の信仰の中心地だったことが見えてきます。

九州本土の構成資産の周辺地形(国土地理院基盤地図情報を利用して「カシミール3D」で作成。高低差を2倍に強調表示)



宗像大宮司家と中世の対外交流



宋風獅子(石像狛犬) (宗像大社神宝館蔵)

中世の宗像大社と宗像地域を支配した宗像大宮司家は、古代豪族宗像氏の子孫とみられ、盛んな対外交流を行って繁栄しました。当時の宗像大社では、年に5931回もの神事が行われていたとの記録も残っています。福津市在自には、当時入海に

面していたと考えられる辺りに「唐坊」と呼ばれた中国人の居住地があり、国際的な港町だったことが分かっています。13世紀には、大宮司家は二代にわたって中国南宋の商人の娘と婚姻関係を結んでいました。八万点に及ぶ沖ノ島祭祀遺跡から出土した奉獻品(全て国宝)を収蔵・展示する宗像大社神宝館には、当時の中国との交流を物語る品々も残されています。1195年に南宋で作られた大宮司の父の供養のために買い求められた阿弥陀経石は、梅園石という中国寧波で産出す



阿弥陀経石(宗像大社神宝館蔵)



『海東諸国紀』「海東諸国総図」(部分。東京大学史料編纂所蔵)
 1471年に朝鮮の申叔舟シンスクチュウが編纂した、日本と琉球についての研究書で、
 この地図は沖ノ島(「小崎於島」)や大島(「於島」)が載る最も古いもの。

る石材で作られたものです。
 1201年に辺津宮の第三宮に奉納された宋風獅子(石製狛犬)も、やはり南宋で作られた精巧な彫刻です。また、色定法師一筆一切経(重要文化財)は、四千年を超える仏教経典(一切経)を、宗像大社の社僧が約40年かけて一人で書写したとされるものですが、これも南宋の商人の協力の下、中国からもたらされた一切経を写したものでした。

14〜16世紀になると、中国に代わって朝鮮との交流が頻繁になり、1412年から1504年の92年間に46回もの貿易船を派遣していたという記録があります。朝鮮側の史料によれば、宗像大宮司家は大島を本拠とする海賊を掌握しているとも記されていて、その力は海の向こうまで知られていたようです。

構成資産

宗像大社

沖津宮遙拝所

宗像大社沖津宮遙拝所は、沖ノ島から約48km離れた大島の北岸にある信仰の場です。沖ノ島を遥か遠くに拝む、遙拝の生きた伝統を伝えます。厳重な禁忌などで通常渡島できない沖ノ島の神事を、島に直接渡ることなく行うために設けられたもので、宗像大社の一部です。

空気の澄んだ日には、ここから水平線にはつきりと沖ノ島を望むことができます。その社殿は沖ノ島の方角を向き、沖ノ島そのものをご神体とする拝殿の役割を持っています。現在も毎年春・秋の沖津宮大祭はここので行われ、通常は閉められてい

る社殿の扉と窓を開いて神事が執り行われます。

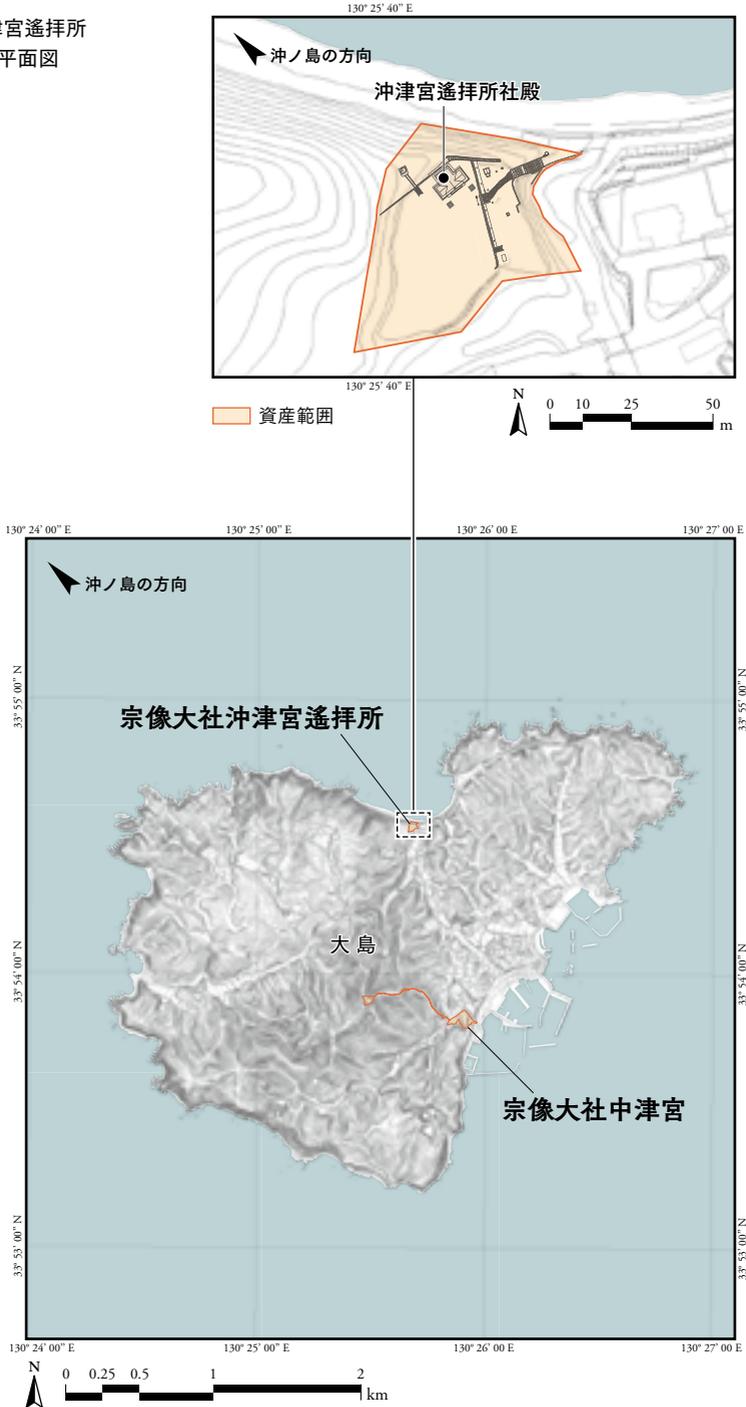
少なくとも18世紀初めまでにはこの地に設けられました。海辺の石段の登り口には「寛延三年（1749年）と刻まれた「澳嶋拝所」の石碑があります。



宗像大社沖津宮遙拝所社殿(内部)



宗像大社沖津宮遙拝所
位置図および平面図



遙拝の伝統

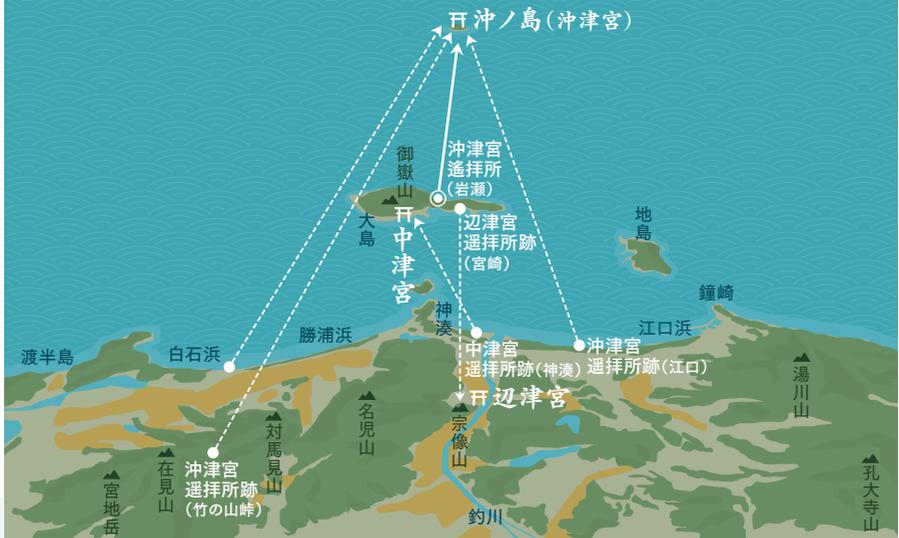
沖ノ島を遙か遠くから拝む「遙拝」の伝統は、大島北岸の沖津宮遙拝所だけで行われていた訳ではありません。

九州本土の海岸や高台、山上にも沖ノ島を望むことができる地点があり、中にはかつて遙拝所が設けられていた場所もあります。江戸時代には、宗像市の神湊（うらみなと）の浜辺（江口浜の周辺）に沖津宮と中津宮への遙拝所がそれぞれ設けられ、福岡藩主が領内の巡見の際、辺津宮を参拝した後には両宮を遙拝したことがありました。なお、大島の南東側の宮崎という地区には、かつて辺津宮への遙拝所がありました。沖ノ島だけでなく、海で隔てら

れた宗像大社の三宮への信仰は、遙拝によって互いに結ばれていたのです。

宗像地域の人々は、遙か彼方の沖ノ島に神の気配を感じつつ、日々の暮らしの中で海上安全、豊漁祈願、五穀豊穰、家内安全など様々な意味を込めて沖ノ島を遙拝していました。例えば、大島の漁師の妻は、沖ノ島で漁をする夫の無事を願い、沖津宮遙拝所から祈りを捧げていたと言います。本土側でも、かつては「沖ノ島籠り」と呼ばれる風習がありました。田植えが終わった夏頃に、集落近くの沖ノ島が見える浜辺や高台などに籠もり、神酒や赤飯などをお供えし

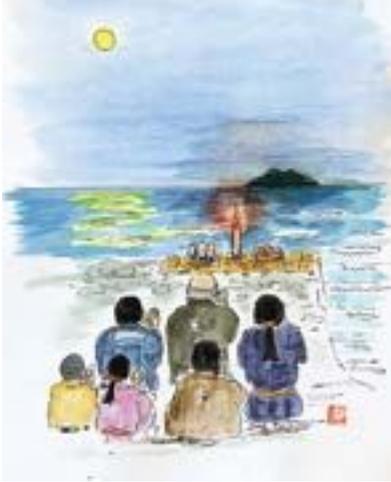
三女神信仰に関する宗像地域の遙拝所、遙拝地点



て、田植えが無事終わったことへの感謝や無病息災を願ったのです。また、沿岸部から山を隔てた福津市の手光という集落でも、かつて疫病が流行した際、沖ノ島が見える竹の山という峠に遥拝所を設けて祈りを捧げ、村が救われたという伝承があります。

このほか宗像地域以外でも、遥拝の伝承や痕跡が残されています。北九州市の北西部、若松区小竹の白山神社近くに石の祠が残される沖津宮遥拝所址は、今は森に包まれています。かつては沖ノ島を望んでいたとみ

られます。また、江戸時代には福岡城下町の荒津山(福岡市西公園)や魚町(福岡市赤坂付近)にも沖津宮遥拝所が設けられていた記録が残っており、荒津山の遥拝所は第6代福岡藩主の黒田継高が設けたものでした。これらのほかにも沖ノ島への遥拝所は各地にあつた可能性がありますので、皆さんもぜひ探してみてください。



「沖ノ島籠り」想像図 イラスト／堀出太一

「福岡城下町・博多・近隣古図」(部分。1812年写。九州大学附属図書館蔵)

荒戸山(荒津山)の岬の部分に「澳津嶋御遥拝所址。是ハ安永(1772～1781)年継高君沖ノ嶋ヲ御遥拝有し所也」と記されている。ただし、ここから沖ノ島が見えたのかは定かではない。



現在の信仰とみあれ祭

現在に至るまで信仰が受け継がれていることが本遺産群の大きな魅力の一つで、そのことなくして沖ノ島の奇跡的な古代祭祀遺跡は現存していません。

遥拝の伝統や禁忌のほかに、現代の宗像三女神信仰を象徴するのが「みあれ祭」です。宗像大社最大のお祭りである秋季大祭の初日、毎年10月1日に行われる神迎えの神事で、沖津宮、中津宮、辺津宮の宗像三女神の御霊が年に一度、辺津宮にそろいます。

「みあれ祭」のルーツである中世の「御長手神事」では、春夏秋冬の年4回、沖ノ島の竹で作った長い旗竿を島の神（田心

姫神）の象徴として、沖津宮を本社とする辺津宮第一宮（44頁参照）に迎え入れました。江戸時代にも、沖津宮の祭祀を司っていた大島の一ノ甲斐河野家が、年に二回沖ノ島に渡島して

例祭を行っていました。「みあれ祭」は、こうした三宮一体で沖ノ島への信仰を伝えてきた宗像大社の伝統に基づくもので、1962年から行われています。

三女神の長姉である沖津宮の田心姫神の御霊は、大島の氏子たちによって、祭りに先立って沖ノ島からいったん大島の中津宮に迎えられます。そして祭りの当日、中津宮の湍津姫神とともに、本土の末妹、市杵島姫神

みあれ祭海上神幸。宗像七浦の漁船数百隻により、大島から本土の神湊で待つ市杵島姫神のもとへ、田心姫神と湍津姫神が迎えられる。



沖ノ島仲間

大島の漁師にとって、沖ノ島は今も昔も良い獲物が上がる絶好の漁場である。しかし、波の高い沖ノ島周辺での漁には危険も多い。一帯で漁をするためには、ある一定の基準のようなものを「沖ノ島仲間」という漁師たちの間で決めているようだ。

沖ノ島仲間は漁協に所属する漁師なら誰でも入れる、というわけではない。漁や操船の技量はもちろん、人柄などを他の漁師たちから認められた者でなければ、その資格は得られない。

シケで漁ができないときは島の清掃をするという。捕った魚はお宮へ献上し、日々の感謝も欠かさない。島のものを持ち帰るなどはもつてのほか。海に浮かんだ木の枝でさえ、取るのをためらう。「したらイカンて言われることをしたら“不言様”の祟りとかバチが当たると、子ども時からよう聞かされよったですもん」。

沖ノ島仲間の漁師たちは、沖ノ島を「神様の海」だと思っている。自分たちはその神聖な領域で恵みを授かっているのだと、彼らは理屈抜きに理解しているのだ。

が待つ神湊へ向けて海上神幸を行うのです。沖津宮と中津宮の女神を載せた二隻の御座船と先導船を先頭に、宗像地域の各漁港、「宗像七浦」から集まった漁船数百隻による大船団が、玄界灘にひしめきます。

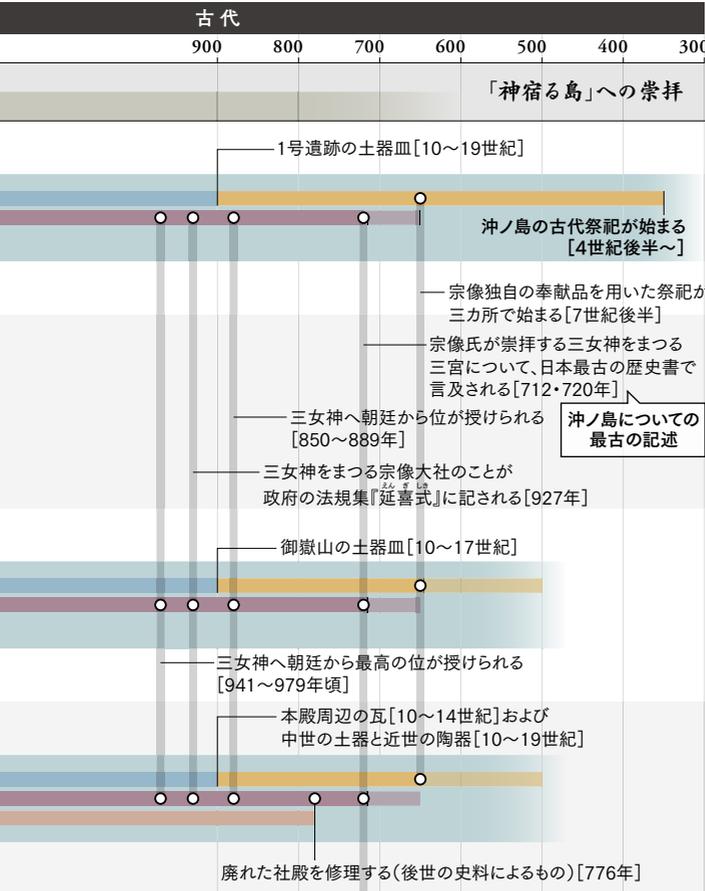
海は豊かな恵みをもたらす母なる存在ですが、時に荒れ狂う場合もあります。宗像の漁師たちにとつて、自分たちの海の守り神である沖ノ島や宗像三女神は特別な存在です。大漁旗をなびかせ玄界灘を進む漁船団の姿は壮観で、古代に玄界灘を舞台に活躍した宗像氏の船団の姿を彷彿とさせます。

大島の漁師が所有する漁船内には、宗像大社の御神札が貼られている。漁には常に命の危険がつきまとう。ゆえに神を感じ、神に見守られながら船を出す。



信仰の継承

- 信仰の場
- 考古学的証拠
- 信仰の担い手の物証
- 文献記録
- 社殿



宗像大社 沖津宮



宗像大社 沖津宮 遙拝所

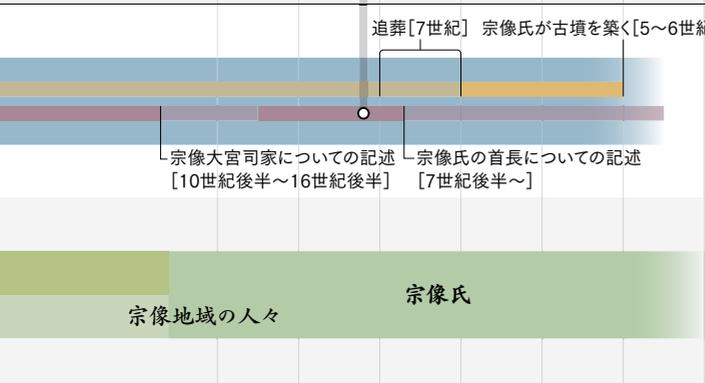


宗像大社 中津宮



宗像大社 辺津宮

信仰の場



新原・奴山古墳群

信仰の伝統を生み出し、受け継いできた人々

信仰の担い手の物証

登録までの軌跡

年	月	できごと
2002年(平成14年)	11月	○宗像市、玄海町、大島村、地域団体による実行委員会が「海の正倉院・沖ノ島くいま甦 <small>よみがえ</small> る太古の口マン」と題するシンポジウムを実施。
2003年(平成15年)	9月	○宗像大社神宝館にて「海の正倉院・沖ノ島大国宝展」を開催。三万一千人の来場者を集める。
2006年(平成18年)	11月	○福岡県・宗像市・福津市が、国(文化庁)に対し、暫定リスト記載に向けた提案書を提出。
2007年(平成19年)	12月	○文化審議会文化財分科会において、本遺産群は継続審議となる。
2009年(平成21年)	1月	○国(文化庁)に対し、「宗像・沖ノ島と関連遺産群」として暫定リスト記載に向けた提案書を再提出。 ○ユネスコの世界遺産暫定リストに記載される。 ○福岡県・宗像市・福津市などによる官民一体の組織である「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議を設立。
2010年(平成22年)	10月	○大島御嶽山遺跡の発掘調査。宗像大社中津宮の原点となる祭祀遺跡を確認。
2012年(平成24年)	8月	○海の道むなかた館(宗像市郷土文化学習交流館)オープン。 ○第6回世界遺産推進会議にて、構成資産を沖ノ島をはじめとする宗像大社および新原・奴山古墳群に絞り込む。

エピソード 守り、伝える。

沖ノ島への信仰は、今も続いている。

漠然とした想いでは、決して続かなかった。

守ろう、伝えようとする

人々の気持ちがあったからこそ、

信仰は受け継がれてきた。

それは理屈や観念的なものではなく、

人々の暮らしにしっかりと息づいており、

信仰を育んだ風景が残されてきた。



世界文化遺産とは、

人類の歴史によって生み出され、

過去から現在へと引き継がれてきた

かけがえない宝物のことである。

「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群――

神社や古墳などの存在だけがその価値ではない。

変わらぬ自然と風景、

そして現在も受け継がれる伝統があつてこそ、

千数百年培われた価値が今に“生きる”。

この人類の宝を

次世代に伝えていくことは、

今を生きる我々の責務である。



世界遺産

「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群
公式ガイドブック

令和2(2020)年1月 初版発行

編集・発行

「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会
(事務局)

〒812-8577 福岡県福岡市博多区東公園7-7

福岡県人づくり・県民生活部文化振興課世界遺産室

TEL : 092-643-3162

<http://www.okinoshima-heritage.jp/>

編集協力 一般社団法人 九州のムラ

デザイン 永田修平

写真 今城秀和／乾祐綺／吉村靖徳／御手洗繁好

本書は、「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群の世界遺産としての価値やその背景について関心のある方々に知っていただくため、世界遺産登録推薦書や広報のためのパンフレットの内容などを再編集して制作したものです。本書の内容の無断転載・無断複製は禁じられています。



国際連合教育科学
文化機関



「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群
世界遺産登録年:2017年

